

2018年(平成30年)9月25日

## 病院長からの一言 Not to do!

弘前大学医学部  
附属病院長 福田 眞作



医療の質の向上、患者の要求の高まりなどで、医師・看護師等すべての医療従事者の心身の負担は明らかに重くなっています。さらに、超高齢化で複合疾患を持つ患者の増加、長期的ながん治療を必要とする患者の増加、といったニーズの変化に伴い、医師・看護師等の負担は今後も続くと考えられます。医療資源には限りがあり、医師数や看護師数は急激な増加は期待できそうにありません(とくに地方では)。ニーズの増大に対応しつつ、求められる質の高い医療を継続して行うためには、医師・看護師等の働く環境を整えるしかありません。

医師の負担軽減の具体策として、クラーク(医師事務作業補助者)が積極的に導入され、本院でも一定の負担軽減効果があったと思われます。医療スタッフ間のタスクシフト・タスクシェアリングについては、シフト・シェア対象者となる看護師の不足がより深刻な本院では検討すらされていません。日常業務をどう変えるべきなの

か?精神的な負担や時間的な負担の原因は何なのか?自己犠牲を伴う伝統的な労働慣行がいまだに行われていないだろうか(強制していないだろうか)? 医師・看護師自身が改革を担う一員としての自覚をもって、日々の業務の見直しをお願いしたい。

ということで、本院でも、①医師の勤務時間把握に係るWG、②医師の業務改善に係るWG、③看護職員の業務改善に係るWG、を立ち上げます。日々の診療業務には多職種の職員が関わっていますので、それぞれのWGは医師・看護師だけではなく、多職種の委員で構成します。もちろん、患者ファーストの医療を実践することが最優先であることに変わりはありません。それ以外のところで、日々の業務の見直しにつながるような議論を期待しています。まずは、やらないようにしよう「Not to do!」といった業務をたくさん見つけてください。ご協力、よろしくお願いたします。

## 放射線治療科、放射線診断科を設置



放射線治療科 放射線診断科 外来スタッフ

平成30年7月1日より、これまでの放射線科から放射線治療科と放射線診断科に分離し再スタートを切りました。これは、平成30年4月1日より弘前大学大学院医学研究科の放射線科学講座を2つに分け、放射線腫瘍学講座と放射線診断学講座を設置したことに対して医学部附属病院も対応するためです。

既にお気づきの方もいらっしゃる

と思いますが、院内の掲示や診察券の受付、会計システムなども、放射線治療科と放射線診断科に変わりました。診療内容については今までと同様で、放射線治療科では外部照射や小線源などを用いた放射線治療やラジオアイソトープによる核医学治療を担当し、放射線診断科ではCT、MRI、PET/CT、シンチグラムなどの各種画像診断やカテーテルを用いた画像下治療(IVR)などを担当いたします。詳しくは、病院のホームページをご覧ください。

一方、外来については、放射線治療科も放射線診断科も今まで通り、外来診療棟地下1階の同じ場所にあり、電話番号も共通です(内線：5280)。そのため、お電話をお掛けの際にはご迷惑をお

## 各診療科等の紹介

### 【心臓血管外科】

心臓血管外科は胸部心臓血管外科学講座の診療部門として、外来・入院患者の治療を担当しています。その診療範囲は幅広く、心筋梗塞や狭心症などの虚血性心疾患および高齢者の変性性弁膜疾患の外科治療、大動脈瘤、末梢血管疾患そして小児の生まれつきの心疾患の治療などです。これに12名のスタッフで対応しています。当科は、津軽医療圏および北秋田医療圏でただ一つの心臓血管外科施設として、循環器内科と連携して多数の循環器緊急症を含む循環器疾患の治療を担当しています。主な対象疾患の一つは不安定狭心症や急性冠症候群と呼ばれる冠動脈の閉塞に対するバイパス手術で、当科では、長年の研究から培った心拍動下冠動脈バイパス術の技術を駆使して、複雑な病変に対しても確実なバイパスを行っており、約90%の症例が人工心肺装置を使用しないオフポンプバイパス術です。こ

れは我が国でも屈指の実施率(全国統計では60%)であり、その手術成績も死亡率0.5%以下(定時手術)、バイパスの開存率98%以上であり極めて良好な成績です。急性大動脈解離や腹部大動脈瘤破裂など、大動脈の緊急疾患も放置すれば死亡する重篤な疾患です。これには、ステントグラフトの導入や人工心肺装置を用いた弓部大動脈領域の人工血管置換術など、患者さんの状態に応じて手術侵襲と根治性を検討して手術方法を選択しており、手術成績は全国平均よりも良好です。この結果を出すために、夜間や週末などでもスタッフが駆けつけて対応しています。小児の心臓疾患の治療で



は、青森県全体の複雑先天性心疾患の治療を担当しており、小児科循環器グループと連携して正確な解剖学的診断のもとで手術を行い、周術期は補助循環の使用や一酸化窒素による肺高血圧の管理などにより良い結果を得ています。私たちのモットーは「医者はよるべなき患者の友」であり、患者さんと家族の笑顔のために、スタッフ一同で力を合わせてより良い医療の提供に心がけています。

(心臓血管外科科長 福田幾夫)

## 外科手術体験セミナーの「弘前大学表彰」について

当科ならびに本院外科系診療科で主催している外科手術体験セミナーに対しての「弘前大学表彰」についてご報告します。弘前大学の開学記念日にあたる5月31日、「弘前大学表彰」表彰式が行われ、当科が代表する形で佐藤学長より表彰状と記念品を頂いてまいりました。今回、外科手術体験セミナーの開催、継続が医学部および地域

社会への貢献に値するとのご評価をいただきました。同セミナーを開催して今年で10年目になります。本院の形成外科、心臓血管外科をはじめ多くの外科系診療科の先生方のご理解、ご協力のもと、成り立っているセミナーだと強く認識しております。この場をお借りして、あらためてお礼申し上げます。

外科手術体験セミナーは、青森県の若い世代の方に、医療職に対して興味を持ってほしいとの思いから企画されました。内容については、わかりやすい体験型であること、私たちが地域に出向くことをコンセプトの軸として立案した経緯があります。私たちが外科医であることもあり、「術衣を纏って、最新の手術を体験する」というプログラムになっています。青森県からもこのセミナーの趣旨にご賛同いただき、県との共催、県教

育委員会の後援というバックアップを受けています。これまでの10年間、青森市や八戸市、弘前市ばかりでなく、むつ市や十和田市、五所川原市の高校を会場に開催してまいりました。受講した高校生は600名を超えます。セミナーに参加した高校生が弘前大学の医学部に入学、そして卒業し、医師としてセミナーの指導にあたるということも最近では珍しくはありません。セミナー受講者のアンケートでは「優しく指導してくれた。外科医師のイメージが変わった。」「絶対に弘前大学医学部に入学します。」などのうれしい感想が大多数を占めます。可能な限り、続けていきたいセミナーだと感じております。

(消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科 和嶋直紀)



(放射線治療科 放射線診断科 科長 青木昌彦)

## 先憂後楽

### グローバル臨床研究



脳神経内科科長 東海林 幹夫

2013年からDIAN研究に関わっています。DIAN研究とは Dominantly Inherited Alzheimer Networkの略称で、優性遺伝性アルツハイマー病発症者および未発症者の経過観察研究で、患者・家族と共にアルツハイマー病の克服を目指して、2008年から米国を中心に開始されました。NIHや製薬企業、アルツハイマー協会の財政支援を受け、グローバルに進展しており、英国、ドイツ、フランス、オーストラリアの各国政府と研究者とともに2013年から

予防介入試験を開始しています(DIAN-trial Unit)。25年以前から開始するアルツハイマー病の自然経過の解明や2019年に公開される予防介入試験結果が世界で待ち望まれています。2014年に、私どもにも参加して欲しいとの要請があり、厚生労働省とAMEDの支援の下、大阪市立大学、東京大学や新潟大学とともに、DIAN-Japanの体制を整備してきました。この間、欧米と日本の間での法律やレギュレーション、言語と文化的背景を標準化して、欧米と同様

なプロトコルの作成と施設体制の立ち上げでほぼ2年を費やしました。特に英語と日本語の細かいすり合わせに膨大な労力が必要でした。弘前大学が臨床コアとしてこのほとんどの作業を行い、DIAN-Japanを牽引しましたが、この間、医学部や病院事務部、各診療科の諸先生にも沢山のお願いをして大変お世話になりました。今、振り返ってみると、これからの臨床研究に必要なことの多くを学びました。

現在、新薬開発には膨大な経費がかかるため、外国企業主導でグ

ローバルな臨床試験が行われています。日本での臨床試験は高額で質の問題も指摘されており、グローバル試験の一部として期待される程度で、大きく立ち後れていると聞きます。弘前大学臨床試験管理センターはこの様な大きな流れの中で、組織を改組してグローバル研究にも対応して、弘前大学発の治療法開発や先端的な臨床研究を目指しつつあります。これからの医療の激しい変動の中で弘前大学病院が日本発の新たな方向性を示して行くことを期待しています。

### 全国国立大学病院事務部長会議 「東北・北海道地区」会議を開催



全国国立大学病院事務部長会議「東北・北海道地区」会議が去る6月29日に本学が当番校となり、本院の大会議室で開催されました。会議には、北海道大学、旭川医科大学、東北大学、秋田大学、山形大学及び弘前大学の病院事務部長、担当課長が参加しました。

開催に当たり、出張で不在であった福田病院長の代理として、伊藤副院長から挨拶があり、引き続き川村事務部長が議長となり、「病院経費による人件費管理について」、「運営費交付金(附属病院機能強化分)の使途と今後の在り方について」、「全国事務部長会議のグループディスカッションについて」のテーマに関する各大学からの状況報告や議論が交わされました。

特に、「全国事務部長会議のグループディスカッションについて」のテーマでは、9月に開催さ

れる全国国立大学病院事務部長会議のグループディスカッションのテーマとして、「働き方改革について」、「病院事務職員の人材育成について」、「国立大学病院の経営状況のアピール方法について」の3つのテーマが示されており、各大学とも振り分けられた自グループのテーマの発表用資料を作成する必要があったことから、テーマごとに自校の状況等を分析した結果を踏まえた活発な議論が交わされました。

なお、前日には、本学が当番校となり行われた、第44回東北・北海道地区国立大学医学部・医科大学事務協議会との合同懇親会がアートホテル弘前シティにおいて開催され、和やかな雰囲気のもと有意義な情報交換等が行われ、今後に実りのあるものとなりました。

次回の当番校は秋田大学となります。(総務課)

### 弘前ねぶたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぶたまつり」が8月1日から7日間行われました。弘前大学のねぶたまつりも大学と地域住民との交流を図ることを目的として、1日、3日、6日の3日間参加し、昭和39年に初参加以来、連続55年の出陣を果たしました。

1日には、附属病院外来診療棟正面駐車場において、小児科に入院中の子供達や保護者、医師、看護師、事務職員等による「小型ねぶたまつり」が運行されました。本学はやしサークル「弘前大学囃子組」等による太鼓と笛の音にあわせて、

子供達は「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ、津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。(総務課)



### 外科手術体験セミナー in 青森 を開催して



去る6月30日、青森高校を会場として「高校生外科手術体験セミナー in 青森」を開催しました。今回は県内全域から56名の高校生が参加しました。スタッフとしては医師58名に加えて研修医13名、医学生15名、協力企業関係者を含めて総勢90名を超える皆さんがボランティアで参加下さいました。開会式では県を代表して三村青森県知事からのご挨拶がありました。高校生に対しては熱い激励の言葉を、スタッフに対しては感謝の言葉を頂きました。オリエンテーションが済み、術着

を纏い、いよいよ外科手術体験プログラムの開始となります(知事も術着に着替えていました)。7つのブースを用意しましたが、ロボット手術のシミュレーターコーナーや皮膚縫合コーナーなど、医師とマンツーマンでの手術手技体験もあれば、内視鏡外科手術コーナーなどのチームでの手術体験もあります。形成外科教室が担当するブースでは水圧式ナイフを使って、デブリードマン手技を体験していただきました。プログラムの後半は、研修医、医学生の皆さんが中心になって高校生の指導にあ

たります。教える側にも程よい緊張感があり、見ていて微笑ましく感じました。4時間に及ぶセミナーは、修了証書の授与、そして自動縫合器を使う際の合言葉「ファイヤー」の掛け声で終了となりました。

今回もセミナーを開催するにあたり、形成外科学講座、胸部心臓血管外科学講座をはじめ、多数の先生方にご協力いただいております。心から感謝申し上げます。

(消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科 和嶋直紀)

### 七夕・納涼祭り

#### 【七夕飾り】

7月2日から9日まで、正面玄関の一角に七夕の笹竹を用意しました。

今年も思い思いの願い事を込めた短冊を飾っていただきましたが、昨年よりも多い数の願い事が笹に飾られました。

昨年度から笹竹を提供いただいているボランティアさんから、笹竹を青々とした状態に保つためのアドバイスを受け実行したところ、効果が表れ、どうにか青い状態を保つことが出来ました。

毎年のことではありますが、患者さんやそのご家族と思われる方々の短冊の願いが胸に響きます。そして、その願いが天に届き、叶いますようにと願っています。

#### 【納涼祭り】

7月26日午後4時15分から、病院正面玄関横で「納涼祭り」を開催しました。

前日には、病院近くの「最勝院・八坂神社」の宵宮を告げる花火の音が、病棟にも大きく聞こえてお



りました。このような中、入院中の患者さんには、ご家族やお友だちと一緒に「宵宮」のような雰囲気を感じていただきたいという思いで、「ヨーヨーつり」、「スーパーボール・光りものすくい」、「千本つり」、「つりゲーム」などを用意しました。

まず、光るうちわ、光る腕輪を手にしてから、色とりどりの風船を選んで持っていただくのですが、今年用意した水玉模様の風船が人気を集め、多くの方に喜んでいただきました。その後、思い思いのゲームの場所へ。ヨーヨーつ

りやスーパーボールすくいでは、何回も挑戦している様子、また、千本つりでは狙った景品を見事に当てた時のうれしそうな表情が印象的でした。

当日は、福田病院長、小林看護部長、川村事務部長が弘前大学の法被を着て患者さん達と一緒にゲームを行い、祭りを盛り上げていただきました。

運営に協賛して下さった団体や企業、また、準備・運営・後片付けに協力して下さったスタッフの皆さんには、この場を借りてお礼申し上げます。(医事課)

### 抗菌薬適正使用支援チーム (AST) の発足と新システム

以前から活動していましたが、2018年度より抗菌薬適正使用支援チーム (Antimicrobial Stewardship Team : AST) が正式に発足しました。近年とくに行政・保健所が、感染対策、抗菌薬適正使用の機能を厳しくチェックしており、病院の感染症管理の質が問われる時代になったのだと思われる。

本院のAST活動は感染制御センターの齋藤、薬剤部の岡村、津山が主に対応しています。一般にAST活動というのは、「院内全体の抗菌薬の使用に目を光らせ、不適切な使用があればそれに介入していく」という形になりやすいのですが、本院ではありがたいことに、「各主治医の先生方からASTにコンサルト依頼があり、それにASTが抗菌薬の選択や検査を推奨する」という、他の病院ではあまり見ない(信頼関係のある)AST活動が実践されています。全国的にもかなりよいモデルとなっていると自負しております。今後ともASTをぜひご活用いただければ幸いです。

感染管理について、もう一つよ

かったことは、細菌検査システムの更新に伴い、「感染症経過表」というシステムを導入していただきました。この経過表は患者さんのバイタル、細菌検査はもちろん、入院理由(経過記録)、体内挿入物の状況、手術日からの日数、抗菌薬、解熱薬、抗がん剤、ステロイド等の投与経過、検査結果の時系列、各日のカルテ(2号紙の医師記録のみ)、看護記録等がすぐ見ることができるようリンクされています。とても便利な経過表に仕上がりましたので、



これらぜひご活用ください。今後ともAST、感染制御チーム (ICT) をよろしくご活用申し上げます。

(感染制御センター 副センター長 齋藤紀先)

### 【編集後記】

南塘だより91号をお届けいたします。原稿をお寄せいただきました皆様には、心から感謝申し上げます。

例年、夏休みを利用した「高校生一日看護体験」があり、今年も30名が参加しました。初めは緊張しながらも、清拭や移送、患者さんとのコミュニケーションなどを体験し、「大変だがやりがいがあり、誇りが持てる仕事」と感じて頂いたようでした。数年後一緒に働けることを心待ちにしています。

今年は西日本の豪雨や、異例の進路を取った台風、各地の記録的な猛暑など、厳しい夏でしたが、病院から眺める岩木山は既に秋の風情になりつつあります。暑さで消耗した体力を美味しい秋で取り戻しましょう。(病院広報委員会委員 工藤順子)

### この人 No.9

本院の多方面で働くスタッフを紹介いたします。



皮膚・排泄ケア認定看護師 古川 真佐子さん

皮膚・排泄ケア認定看護師古川真佐子さんをご紹介します。古川さんは2004年に本院第一号となる認定看護師資格を取得、同時に青森県で初のWOC(創傷・オストミー・失禁)ナースになりました。認定看護師は、日本看護協会が行う認定看護師認定審査に合格し、ある特定の看護分野において熟練した看護技術と知識を有することが認められた者を言います。彼女は消化器・乳腺・甲状腺・小児外科病棟で10年間勤務し、ストーマケアや褥瘡ケアに携わる中で、WOCナースの存在を知り、エビデンスのあるケアを実践したいという強い思いを抱き、日本看護協会看護研修センター主催のWOC看護学科コースに挑戦しました。

認定看護師には「実践」「指導」「相談」の3つの役割を果たすことが求められています。2006年に褥瘡ハイリスク患者加算新設に伴い、褥瘡管理者として褥瘡対策室専従配置となり、体圧分散マットレスや高機能エアマットレスの導入・整備に取り組み、褥瘡対策チームと連携し、褥瘡発生予防・治療のための計画作成や継続的なケアの実践を行いました。病棟看護師からのコンサルテーションを受け、最適なケアやポジショニングを指導することで褥瘡の早期発見・重症化予防に貢献しました。また、院内外の研修会の講師を務め、看護師の力量向上に尽力しています。認定看護師の活動に際し、皆様のご協力に感謝申し上げます。

(高度救命救急センター 看護師長 古館周子)